

100周年記念式典

祝 辞

上智学院 理事長
高 祖 敏 明

経済学部創設 100 周年を、皆様と一緒にこうしてお祝いできますことをうれしく思います。まずは山田幸三経済学部長をはじめ先生方や職員、また、今日この場にいらっしゃる卒業生の皆様、さらには、ご支援を賜っております関係各位にお祝いを申し上げます。おめでとうございます。

先ほどの山田学部長の式辞にございましたとおり、経済学部は小さな芽生えから、大きな学部へと発展してきました。この発展を担っていただきました皆様方に、心より感謝を申し上げたいと思います。

経済学部はとても運のいい、幸運な学部だと思います。上智大学の建学と同時に創設された関係から、大学の周年記念の年にいつも一緒に祝ってもらえるので、他の学部からはうらやましがられています。ちなみに上智大学創設時の学則は、第一条で「本大学は、哲学、ドイツ文学、および商業に関する完全なる高等教育を授くるをもって目的とす」と、哲学科、ドイツ文学科、商科の三科でスタートすることを高らかに謳っています。

上智大学の原点には、日本にパリ大学のような高等教育機関をつくって、東西文化交流、思想交流の拠点にしたいとのイエズス会宣教師フランシスコ・ザビエルの想いがあります。では、なぜ上智大学は創立当初、商科をつくったのでしょうか。哲学やドイツ文学では学生が集まらないと考えたからかもしれませんが、それにしてもなぜ商科なのでしょう。

1908 年に、時のローマ教皇ピオ 10 世（在位 1903 年 -1914 年）の要請に応じて、ドイツ人のヨゼフ・ダールマン神父、フランス人のアンリ・ブシェー神父、イギリス人のジェームズ・ロックリフ神父が上智大学設立のために、ローマのイエズス会本部によって日本に派遣されました。その後、ドイツ哲学者のヘルマン・ホフマン神父、カトリック司祭にして漢学者の土橋八千太師つちはしやちたといった方々が、上智大学創設に尽力されました。草創期の先人たちのプロフィールからすると、哲学・ドイツ文学という学科構成は自然に感じられますが、そこに商科を加える狙いは何だったのか、やはり疑問に思われます。

そこで歴史をひもといてみますと、宣教師ザビエルは 1549 年 8 月 15 日に鹿児島に上陸しています。自分たちを日本に運んできた船が 11 月 5 日にマラッカに戻っていくのに合わせて、五通の手紙を託しています。その中には、「これまで発見された諸民族の中で、日本人ほど優れた民族はない」と書かれた有名な書状があります。それ以外の四通の手紙のひとつでは、堺の商人が貿易で扱っている商品のリストをマラッカの商人に送っています。宣教師といえば、宗教の教えだけを伝えるとイメージしやすいのですが、宣教活動はさまざまな生活物資の支えがあって初めて可能になるものです。ザビエルは、社会経済活動にまで目を向けていたようです。

その後、時代は下って、ピオ 10 世の前任者ローマ教皇レオ 13 世（在位 1878 年 -1903 年）は、カトリック教会と近代社会との間の相互理解の深まりを目指して、1891 年に回勅『レルム・ノヴァールム（Rerum Novarum：「新しき事がらについて」の意）』を発表しました。この回勅は、「資本と労働の権利と義務」

という表題が付けられ、カトリック教会が当時の重要な社会問題であった労働者の権利擁護に取り組むよう励ました、画期的なものとして知られています。上智大学設立のために三人の神父が日本に派遣されたのは、この回勅発表から17年後の出来事でした。

こうした時代背景に照らしてみますと、草創期の先人たちの胸には、上智大学における研究・教育は哲学や文学だけに限らず、社会全体を支えている経済・経営をも対象にし、経済活動・商業活動とキリスト教的な思想との接点を現実社会の文脈の中で見だし、世に広めていきたいとの夢があったのだろうと考えることができます。単なる学生確保のための方策ではなかったと思います。実際、開校当初の学生は、全学合わせても15人ほどしか集まらなかったと伝えられています。

こうして大学設立とともに産声をあげた商科は、その後、経済学科と経営学科からなる経済学部へ改組され、今日に至っております。『上智大学経済学部七十周年記念論文集』（1985年）の序文では、当時の内野達郎経済学部長が、日本経済、上智大学、そして経済学部の発展を振り返り、「流れてやまず、求めてやまないものは、歴史の潮流である。越し方をかえりみ、この70年をひとくぎりとして、われわれはより良き明日を志して、今後とも、たゆみなく、ゆるぎない発展への努力を重ねていきたい」と述べておられます。

次いで、上智大学創立75周年を機に、1988年に出版された『上智大学の未来像—二十一世紀へ展望』には、坂本康實教授（当時）が「経済学部の将来への課題」というテーマで寄稿されています。その中で坂本先生は、経済学部の将来を展望する試案として、「欧米の大学には寄付講座という制度がある。・・・（中略）・・・この寄付講座をいろいろな形にアレンジして経済学部の教科の充実を図ってはどうかと思うのである」と述べておられます。

坂本先生は、寄付講座に関して次のような試案を披露されています。まず、卒業生に時間と知恵を寄付してもらい、卒業生の輪講による学部の専門科目を設置するのが、第一段階です。講義内容・出講者については、学部教員と卒業生代表とで協議することを想定されていました。講義が軌道に乗ってきたら、出講者を卒業生以外にも広げるのが第二段階です。卒業生以外の出講者には無報酬で講義をお願いするわけにはいかないため、講座維持のための寄付を卒業生をお願いすることを、坂本先生はお考えでした。さらに第三段階として、受講者を学生以外にも広げて社会人向けの講座を開設し、その次のステップとして専門職大学院としてのビジネス・スクールを開設することを提案されています。

坂本先生のご提案は、アカデミックな知識と実務家の経験とを融合した、高度な実務能力を備えた人材育成を目指したものであり、こうした教育プログラムを運営するためには、教員と実務家、なかでも本学卒業生との協議の場が必要となります。経済学部の同窓会「経鷺会」は、こうした機運のなかから誕生してきました。また、上智大学では、10年ほど前から全学的に寄付講座を積極的に展開して、教育プログラムの拡充を図っています。

上智大学は創立100周年を迎えるにあたって、これまでの歴史を振り返る一方で、今後の展望を見据えて、大学としてのミッションを“Sophia - Bringing the World Together”「叡智（ソフィア）が世界をつなぐ」というフレーズに要約しています。同時にまた、叡智を備え世界をつないでいく人材のイメージを“Men and Women for Others, with Others”という言葉で表現しています。

イエズス会第30代総長アドルフォ・ニコラス神父は、2008年12月22日に、本日より同じここ10号館講堂で講演され、現代世界の大きな問題を以下のように指摘されました。

- (1)「貧困の問題」に関わる「社会的なチャレンジ」
- (2)「環境の問題」に関わる「エコロジカルなチャレンジ」
- (3)「教育の問題」に関わる「文化的なチャレンジ」
- (4)「人間性そのものの問題」に関わる「倫理的なチャレンジ」

これらは、イエズス会、カトリック教会にとってのチャレンジであるだけでなく、上智大学にとってのチャレンジでもあります。これらの挑戦課題は、現代社会の経済活動・経営活動とも深く結びついています。

創設 100 周年を迎えた経済学部は、今後もますます発展していかれるものと確信しておりますが、上智大学のチャレンジ、現代社会の挑戦課題の解決に向けて、経済学部が中心的な役割を果たしていただくようお願いしております。「世界に並び立つ大学」を目指して発展していく上智大学を、経済学部が先導していただくものと期待しております。『上智大学経済学部七十周年記念論文集』に寄せられた、内野学部長の「われわれはより良き明日を志して、今後とも、たゆみなく、ゆるぎない発展への努力を重ねていきたい」との言葉は、今日この会場にも鳴り響いているように感じられます。

100 周年のお祝いと将来への期待を申し上げて、私からの祝辞とさせていただきます。改めまして、本日はおめでとうございます。